

病気のドミノ一欠損歯列を通して考える健康長寿」と題し東京歯科大学臨床教授 武田孝之氏が、「従来の補綴治療で補うことが難しかった要素の改善は、インプラントを使用することでさらに高次機能回復が可能となった。しかしこの従来の歯科治療の目的は、今や中間ゴールにしか過ぎず、高齢社会においては健康を維持し、健やかな生活を自分の力で勝ち取ることが歯科医療の目標となる」と講演されました。

基調講演2では「健康長寿を目指してー今後の歯科衛生士の役割ー」と題しポトスクエア歯科クリニック勤務 歯科衛生士 安達恵利子氏が、「今までの歯科衛生士の業務は、咀嚼機能が回復した患者に対し食べられる喜びを共に分かち合い、治療後のメインテナンスはブラークコントロールを中心とした清掃がメインであった。今後は咀嚼機能の回復と維持が毎日の食事につながり、毎日の食事が全身の健康に繋がることが患者さんに認識させることが最重要課題である」と述べられ、勤務されているクリニックで行われている全身の健康管理について講演されました。

講演終了後、当県松岡拓治常務理事を座長としてシンポジウムが開催され、活発な議論が交わされました。その後、次期開催県の鹿児島県歯科医師会森原久樹会長にペナントが授与され、同会長より来年度の大会に向けての挨拶がありました。最後に九州歯科大学副会長 中嶋敬介氏の閉会の辞により本大会は無事閉幕しました。

最後に本学会の開催にあたり、多大なご支援を戴きました公益財団法人肥後医

育振興会に心より感謝申し上げます。

「第二十八回熊本医学・生物科学国際シンポジウム」の開催報告

熊本大学大学院生命科学研究部
脳回路構造学分野教授 玉巻 伸章

肥後医育振興会様には、平素より医学教育部の活動に対し、格別のご高配を賜っておりますが、この度は、更に第二十八回熊本医学生物科学国際シンポジウムの開催に際し、手厚い支援を頂きました。この場を借りて、今一度御礼申し上げます。

今回のシンポジウムでは「神経疾患の治療を目指した基礎研究の進展」というテーマを設定し、国内外の著名な研究者を招致して、平成二十四年十一月十五日（木）に、熊本市医師会会館（本荘）にて開催いたしました。

昨今、様々な組織の再生が可能となったことが報道されています。しかし中枢神経系の疾患に関しては、その進行を抑えることのみが治療法でありました。その様な中、神経系の分野によっては、再生医療技術の進歩に伴い、その治療法が提案されつつあります。皆様もご存知のように、今回のシンポジウムでありました、神戸理化学研究所の高橋政代先生、笹井芳樹先生の研究により、黄斑色素変性症という網膜の病気を、iPS細胞から再生した網膜を移植することで治療する手法が間もなく始まります。二日間のシンポジウムに於いては、加えて、大脳皮質、内耳の再生に関する研究成果が披

露されました。

六つのセッション（統合失調症、視覚系、大脳基底核、アルツハイマー病、聴覚系・内耳、聴覚系・大脳聴覚野）を準備し、鍋島俊隆（名城大学 日本）、Akira Sawa（ジョンホプキンス大学 米国）、玉巻伸章（熊本大学）、笹井芳樹（理化学研究所 神戸）、高橋政代（理化学研究所 神戸）、西昭徳（久留米大学 日本）、山田和慶（熊本大学）、武田雅俊（大阪大学 日本）、池田学（熊本大学）、Bart de Strooper（VIB and KU Leuven, ベルギー）、Yehosh Raphael（ミシガン大学、米国）、伊藤壽一（京都大学、日本）、Takao Hensch（ハーバード大学、米国）、力丸裕（同志社大学、日本）、以上十四名の学内外の講師を招待し、それぞれの領域で進む新しい研究成果をご披露いただきました。

この様な著名な方々の講演をより多くの方々が聴講できるようにと、会場を熊本市医師会会館とし、熊本県の医師、熊本大学生命科学研究部の研究者、大学院生、医学部学生にポスターを掲示、配布し、周知する努力も行いました結果、会場にて配布しました抄録冊子の数から、実質一四〇名が、延べにして三六〇名が聴衆として参加され、どのセッションでも四〇名から八〇名の方々が熱心に耳を傾けられておいででした。このように多くの方々の関心と呼んだことから考え、有意義な会であったかと自負しております。今回のシンポジウムを切っ掛けに、熊本大学の神経関係分野の方々の研究が進展されることを願っております。

第六十五回日本薬理学会西南部会開催報告

第六十五回日本薬理学会西南部会
高濱 和夫

日本薬理学会西南部会は、日本薬理学会の北部会、関東部会、近畿部会、および西南部会の四つの部会の一つで、第六十五回日本薬理学会西南部会は、平成二十四年十一月二十三日（金）熊本大学薬学部を会場として開催されました。特別講演一題、一般口頭発表六〇演題、ポスター発表二五演題、ランチョンセミナー一題の発表があり、活発に討議が行われました。

学問の発展・深化に伴い、学会の意義や在り方も変容しつつありますが、一つの領域および関連する領域の研究者が一堂に会して日ごろの研究成果を発表し、刺激しあうことは大きな意味があります。また、研究者の卵である学生にとっては、学会に出席して日ごろ、文献上では知らない研究者と直接話し合える機会でもあり、それも学会という集会の大きな意義であることは論をまちません。

薬学部の薬剤師養成教育が六年制となり、薬学系大学院生の激減という状況の中で、参加者を如何に確保するかということ、薬理学会でも一つの大きな課題ですが、学部学生の研究発表の場としてポスター発表を設けたこともあり、発表演題数は過去最高となり、参加者数も二百数十名に上りました。特別講演には熊本大学大学院生命科学